
人魚姫の求める人

スエルテ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人魚姫の求める人

【Nコード】

N2073H

【作者名】

スエルテ

【あらすじ】

有名な童話「人魚姫」をベースにした創作です。王子に憧れて足を手に入れた人魚姫が新たに出会った相手は……。シリアス、短編です。

（前書き）

昔のネタ帳で見つけて、勢いで書いた短編です。
童話と言つより、ほぼファンタジーな内容かもしれません。

わたしはあの日、人間に恋をした。そのために声と引き換えに、二本の足を手に入れた。

誰かと他愛の無い話をしたり、歌うことが好きだった。それがもうできない。

けれど、それでも。

それでもいい、と思った。あの人の傍にいられるなら。

日の光がこんなに白くて眩しいことすら、驚きだった。波が打ち寄せて音が響くことも知らなかった。裸足の足が、柔らかい砂に沈む。その感覚が不思議で、でもとても嬉しくて、わたしは目を細める。

昨日、再びあの人に会った。嵐の夜に沈んだ船から助けたあの人。明るいところで見て、綺麗な目をしていると思った。その目がわたしを捉えて、微笑んだ。

彼は、わたしを覚えていない。わたしが助けたことも知らない。彼にとってわたしは、浜に流れ着いた、言葉を失った女の子でしかない。

それでも、微笑んでくれた。名前は、と訊ねてくれた。すぐに答えなかった。でも……できなかった。

どう伝えたらいい？

わたしの名前。

わたしは人魚であること。

それから、誰よりもあなたを好きだということ。

できないと分かっているのに、何度も声を出そうとしてみる。もちろんそれは音にはならない。ただ唇が形を成すだけ。喉に手をやる。何も変わりはないのに。

いや、変わりはある。足。それを手に入れたのも、代わりに声を失うことなんて、代価としては安いものかもしれない。

わたしは暫く足で浜辺を歩くことに夢中になった。だから、その人が現れたのに気付かなかった。

彼は、高い岩に座ってわたしを見下ろしていた。まるで値踏みするように。濃い色の肌と対照的な薄い色合いの瞳が笑っていた。口元にも笑み。でもそれはどこか人をからかう様子で……。

「王子が助けた娘ってアンタだろ？　口がきけないんだってな」
「……………」

わたしは思わず後ずさる。彼のその口調を少し不快に感じたから。そして、ただじっと見上げる。口を固く閉ざして。

たとえば話せたとしても、きつと同じことをしたと思う。それほどに彼の印象は良くなかったから。

そんなわたしの様子にまるで構わないとでも言うように、彼は続ける。

「そんな警戒しないでくれ。俺は王子の乳兄弟でね、アストリアってんだ。今は親父の仕事を継いで、商船に乗っている。さっき帰ったばかりなんだ。そしたら、王子が昨日浜辺で娘を拾ったって聞いてさ」

ひらりと軽い身のこなしで、岩から飛び降りた。そしてわたしの目の前に立った。わたしは、それでもまだ見上げている。思ったよりも背が高い。

「ふーん、あんななかなか可愛い顔してるじゃないか。ああ、美人じゃないな。けど美人なんて作られた人形みたいでつまらない。あんたみたいに、ちょっと愛嬌があるほうがいい」

なんて失礼な男！

わたしは頬がかつと熱くなるのを感じた。口がきければ、罵ることも簡単なのに！ それができない代わりに、できるだけ鋭く睨みつける。

「そんな怖い顔するなって。可愛いのが台無しになるぜ？ あんた名前は？ そうか、話せないから、答えられないんだよな」

そこで彼は、顎に手を当てて、何やら考える仕草をした。そうしていたのは少しの間で。

「呼び名がないのは不便だ。マリーローズ、そう呼ぶことにしよう。俺の船の女神……船首像の名だ。キレイだろう？」

勝手に名前をつけるなんて！

わたしの怒りも限界だった。くるりと背を向けて歩き出す。

「マリーローズ、また会おうぜ」

彼の声が追いかけてきたけれど、わたしは振り向きもせず、その場を離れた。

もう二度と会うものか、と思っていたのに。

彼、アストリアは何度もわたしの前に姿を現した。浜辺、お城の庭、時にはわたしに与えられた部屋にまで。

今日は庭だった。広い庭園、整えられた緑の木々。その形の一つ一つが面白くて、わたしは軽く指先で触れながら歩いていた。

「今日はいい天気で散歩日和だな」

木の陰から既に聞きなれた声がしたかと思うと、いつの間にかそこにいる。いつものことだった。

「マリーローズ、今日はこれを持ってきた」

そう言っ手渡されたのは、大きな本という物。わたしは人間の文字を読むことはできない。

でも、その様々な色や形を目で辿るのが面白くて、すぐに夢中になった。庭のあちこちに備え付けられた石のベンチに腰掛けてそれを膝に置く。

「これは外国の本なんだ。内容は、その国の宗教のものらしいんだけど」

らしい、という言葉に顔を上げる。

「そう、俺も読めない。でも、見てるだけでも何かその国のことが分かるような気がするよな」

アストリアは苦笑いした。わたしも思わずつられて笑う。

文字が読めなくても、それは十分に魅力的だった。ページを捲ると、遠い異国の不思議な香りがした。

海の外へ出るだけでもとても勇気があることだった。今、その外の世界にいて、毎日が楽しいと思う。けれど、わたしが想像していたよりも遥かに世界は広いようだ。いつしか色々な国へ行ってみた

いという憧れが心の奥底に芽生えていた。

アストリアは、色んな国を知っている。そしてそれをわたしに教えてくれる。初めは遠慮のない彼が苦手だったけれど、今は話を聴くのが楽しみになっていた。

王子とも、毎日お城で顔を合わせた。

その度に彼は優しく微笑んで、何か足りないものはないか、と氣遣ってくれる。

わたしは彼が好き。

彼の柔らかい金色の髪が好き。

深い色の瞳が好き。

形よく微笑む口、耳に心地よく響く声が好き。

この気持ちは今でも変わらない。

そしてそれをどう伝えたらいいのか、今でも分からない。

そんな日々を幾日も数えた頃。

わたしは海が少しだけ懐かしく感じて、夜の浜辺へ来ていた。海の闇は怖いと地上の人々は言う。呑みこまれてしまうように錯覚するから、と誰かが呟いたのを聞いたことがある。

「夜の散歩かな？」

すぐ近くからの声。アストリア。

「マリーローズは本当に海が好きなんだな。夜の海ですら怖くないなんて」

いつもの口調にいつもの笑み。そしてその手には……。

「そんな貴女にこれを差し上げましょう」

芝居がかった仕草で差し出されたそれは、淡い色合いの、大きな貝。

「……………」

海の生活が脳裏に蘇る。懐かしさにそれを頬に当てる。何よりも嬉しい贈り物だった。足を手に入れ、海を捨てたことを後悔はしていないけれど、懐かしさだけは拭い去ることができなかったから。

お礼が言いたかった。だから、微笑んで、彼の濃い色の手をそつと握った。それで気持ちは十分伝わったと思う。なぜなら、彼も微笑んでいたから。いつもの大袈裟な笑みではなく、穏やかな優しい笑顔。彼のそんな表情は初めてだった。

そして、わたしの心の中の何かが変わった。

翌日、わたしは絶望の底にいた。

王子が他の国の姫を妻に迎えると知ったから。それを聞いて、部屋ベッドに伏せて泣いた。泣くことしかできなかった。ただもう悲しくて、苦しくて。呼吸もままならない。どうしたら良いのかさえも分からない。

わたしが足を手に入れる代わりに、声を失うだけではなく、王子と恋に落ちなければ海の泡になって消えるという条件もあった。

それを忘れていたわけではないけれど。そして、それが悲しいわけでもなくて。

いつまでそうしていたか分からない。

日が傾きかけた頃、誰かに呼ばれた気がして海に向かっていった。そこにいたのは懐かしい人だった。姉達だ。でも、どうして？

姉達は、わたしに一本の短い剣を差し出した。わたしに足をくれた魔女と交渉したのだと言う。これで王子を殺せば、わたしは消えずに済む、と。

姉達はそうして海に戻って来て、と言った。わたしは冷たく光る剣を胸に抱いて、姉達を見送った。

そしてそれをお城の人間に見られていたなんて、知りもしなかった。

夜。部屋の窓辺に座り、手の中の鈍い光から目を逸らせないでいた。

わたしが王子を……？

そうすれば、わたしは生きることができる。

いいえ、そんなことできない、できるはずがない、わたしには……

………！

その時。

「マリーローズ！ マリー！ 開けてくれ！」

アストリアが扉を強く叩いた。ただ事ではない切羽詰った呼びかけに、扉を開く。すると息を切らし、苦痛に眉根を寄せたアストリアが立っていた。

「早くここを出るんだ」

わたしを見るなり、彼は早口にそう言った。

「王子がマリーローズの命を狙ってる。あんた……いや、君が王子の暗殺を企ててるなんて噂を流した奴がいるんだ」

―― ?

何を……言ってるの？

「俺はそんな話は信じない。君が人間じゃないなんて馬鹿げてる！」

王子がわたしを？ どうして、どうして――

「マリー！」

アストリアが、呆然と立ち尽くすわたしの肩を強くゆすつた。足元には、手から滑り落ちた剣。彼はそれには気付いていない。

「いいか、よく聞くんた。マリーのことは俺が守る、君は俺を信じる。言葉なんてなくても大丈夫だ、俺と一緒に逃げよう」

わたしの目を真っ直ぐに見つめて彼は言う。

―― いいえ、だめよ。できない。

できるわけがないわ。だってわたしは死んでしまうのよ。

「世界は広い、ここを失っても、いくらでも生きていける。色々な国を見せてやる。だから行こう、マリーローズ」

そんなことができるはずはないと分かっている。それでも。それでもわたしは、自分の揺るぎない気持ちに気付いていた。

アストリアと共にいたい、と――

わたしたちは海にいた。海の中ではなく、その上を走る船の上。アストリアの船。

手すりに両手を揃え、遠く離れたお城の光を見やる。深い闇の中、鋭く光っている。それは美しかった。けれど、何も感じない。わたしの感情は、もう死んでしまったの？

振り返ると、アストリアと視線が重なった。

お互いにぎこちなく微笑んで、手を伸ばして――

そこで、世界がばやけた。伸ばした自分の手が、淡くなり、見えなくなつた。最期に伝えたかった。だから、存在するはずのない声を風に乗せた。

愛してる。

彼に聞こえたかしら――？

わたしには記憶がなかった。気付いたら、この街にいて、この食堂で働いて、それなりに忙しい毎日を過ごしている。でも、覚えていることもほんの少しだけあった。それはマリーローズという名前と、誰かを探しているということ。

たくさんの船乗りが集うこの街にいれば、いつか会える、そんな気がしていた。それが誰かは分からない。けれど、とても大切な人だったと思う。名前は確か――

「アストリア！ 久し振りだね」

威勢のいい女将の声に、テーブルを拭いていた手を止めて振り返る。そしてその人を見る。

「！」

彼はわたしを見て、信じられないと言った表情で動きを止めた。わたしも同じだった。

「マリーローズ……なのか？」

「あなた……わたしが探していた人だわ」

次の瞬間、わたしは彼の腕の中にいた。強く抱きすくめられる。痛いほどに。それから彼、アストリアは、わたしに綺麗な貝を差し出した。

わたしは、確かにそれに見覚えがあった。だから受け取って、微笑んだ。

「わたし、あなたに伝えたかったことがあるの。……愛してる」

そこで不思議な疑問が浮かび、わたしはおかしさにひとり瞬きした。

ああ、今度はちゃんと彼に聞こえたかしら？ なんて

(
E
N
D
)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2073h/>

人魚姫の求める人

2010年10月15日01時22分発行